

語りはじめたアフロブラジル作家たち

— 原点を見つめなおして —

武田千香

はじめに

2020年、あるアフロブラジル作家の小説がブラジルの代表的な文学賞であるジャブチ賞（小説部門）とオセアーノ賞をダブル受賞して話題になった。イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール（Itamar Vieira Junior）の『曲がった鋤（*Torto Arado*）』である。この作品が最初に刊行されたのはブラジルではなく、まずは2018年のポルトガルの文学コンクールのレヤ賞の受賞作品として2019年1月にポルトガルのレヤ社から出版され、ブラジルではその後、同年8月にトダヴィア社から刊行された。最近、ブラジルではヴィエイラ・ジュニオールに限らずアフロブラジル作家が躍進しはじめており¹、2019年には女性作家のコンセイサオン・エヴァリスト（Conceição Evaristo）がジャブチ賞の「今年の文人（Personalidade Literária do Ano）」に選ばれ話題を集めた。

ブラジルは20世紀前半から長らく「人種デモクラシー」の看板のもと人種間の調和が実現された国というイメージが定着し、人種差別が存在しないと言われた時期すらあった。だが軍事政権末期の1970年代後半の民主化運動とともに高まったマイノリティの運動の中で黒人運動も高まり、ブラジルにおける人種主義の認識にも変化が生じ、現在では人種差別的な慣行が根強く存在していることが公にも認められるようになっていく。それと並行して文学においても1980年前後から徐々にアフロブラジル作家が声をあげはじめた。それが結実したのが近年のアフロブラジル作家の活躍であり、また文学賞の受賞なのだが、それにしてもここに至るまで40年もの歳月がかかった事実には重みがある。それだけブラジルの文学が白人中心であり、アフロブラジル作家が周縁に置かれてきたということなのであろう。

本論ではまずアフロブラジル作家らが声をあげはじめたとき、ブラジルの文学がどのような状況だったのか、その起点を確認し、そのうえで劣勢の状況を打開するために、彼らが何をどのように語りはじめたかを、具体的に小説3冊を取り上げて考察していく。対象とするのは、前述の『曲がった鋤』のほか、『色の欠陥（*O defeito de cor*）』（アナ・マリア・ゴンサウヴィス Ana Maria Gonçalves 著）と『皮膚の内側（*O avesso da pele*）』（ジェファソン・テノーリオ Jeferson Tenório 著）である。

1 本稿の提出後、2021年11月25日に、2021年のジャブチ賞（小説部門）でも本編で扱ったアフロブラジル作家ジェファソン・テノーリオの『皮膚の内側』が選ばれたことが発表された。

1. 語りのスタート地点

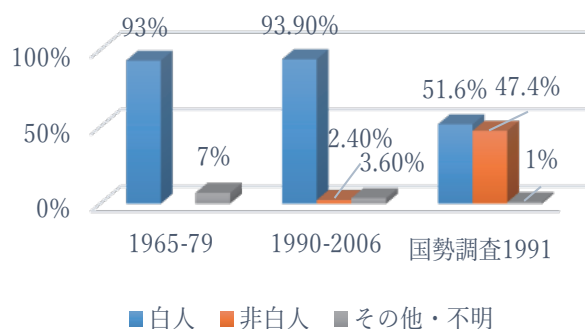
もしブラジルの文学の白人偏重が過去のことなら、かつてこの国がポルトガルの植民地だったことを考えれば自然であろう。だが問題はその傾向が現代でもなお色濃く残っていることである。その実態を衝撃的な数字で客観的に明らかにしたのが、ブラジルの現代文学を人種的な観点から調査したヘジーナ・ダルカスターニュ (Regina Dalcastagnè) の研究である。少し長い引用となるが、アフロブラジル作家らが語り始める起点を確認するうえできわめて興味深い有用なデータなので、紹介したい。ダルカスターニュは、1965年～1979年 (以下「第I期」) に主要な出版社2社²から刊行されたブラジル人作家80人による長編小説130作と、1990年～2004年 (以下「第II期」) に主要な出版社3社³から出版されたブラジル人作家165人による長編小説258作を対象に、作家の人種のほか登場人物の人種や職業などについて調査を行った⁴。

1.1. 人種・ジェンダーにおける偏重

この調査によれば、まず作家を人種別に見た割合、第I期では白人が93%、不明が7%、第II期では白人が93.9%、非白人が2.4%、不明が3.6%⁵占めており、いずれの時期においても白人作家が圧倒的に多いことがわかる。実際の人口は1991年の国勢調査では白人の割合が51.6%、非白人が47.4%であるから⁶、それと比べると、ブラジルの現代文学にはきわめて人種的偏りが存在していることがわかる (グラフ1)。

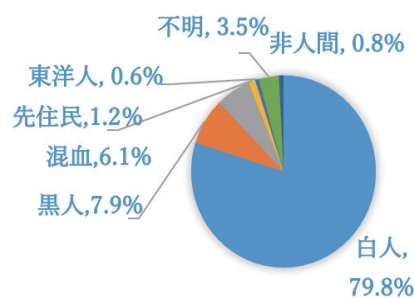
偏りは登場人物においても顕著である⁷。第I期では登場人物の75.8%が白人で黒人は6.3%、混血が10.5%であり、第II期は

作家の人種別割合



グラフ1 (DALCASTAGNÈ(2014)に基づき、筆者が作成)

登場人物の肌の色
第II期



グラフ2 (DALCASTAGNÈ(2014)に基づき筆者が作成)

2 Civilização Brasileira 社と José Olympio 社.

3 Companhia das Letras 社、Record 社、Rocco 社.

4 DALCASTAGNÈ,(2014), pp. 309-337.

5 DALCASTAGNÈ,(2014), p. 312.

6 IBGE (2007) p. 12. 国勢調査は黒人 (negro) と混血 (pardo) に分けて調査し、それぞれ5%と42.4%である。

7 DALCASTAGNÈ,(2014), pp. 313-314.

登場人物の79.8%が白人で、黒人は7.9%、混血が6.1%である(グラフ2)。第Ⅱ期では若干黒人の登場人物が増えたものの混血がわずかに減り、逆に白人の登場人物はむしろ増えており、状況はほとんど変わっていない。ブラジルの現代文学では実に5人に4人の登場人物が白人ということになる。また第Ⅱ期の小説の56.6%に非白人の登場人物が一人も出てこない一方、白人が出てこない小説はたった1.6%しかなく、しかもそれらは2冊に集中しているという。このこともブラジルの文学の物語世界がいかに白人中心であるかを物語っている。

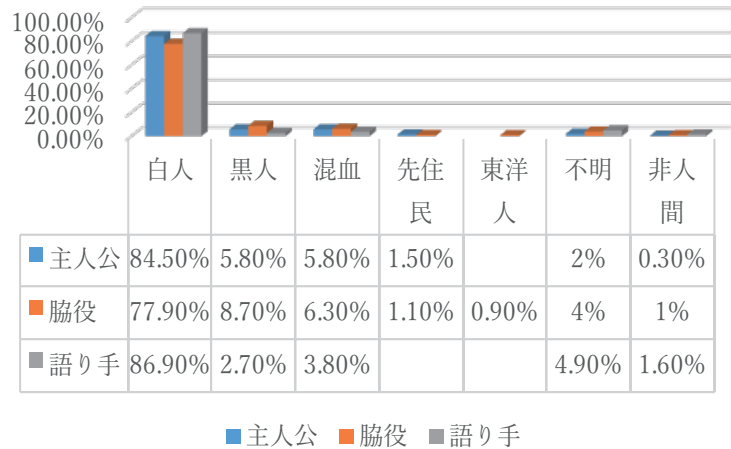
さらにこの偏りは主役と語り手についてはさらに大きくなる⁸。第Ⅱ期の場合、主人公の人種構成は白人が84.5%、黒人が5.8%、混血が5.8%であり、声を持つ語り手になるとその格差はさらに大きくなり、白人が86.9%、黒人はわずか2.7%である。登場人物ではなんとか7.9%を占めていた黒人は、主人公では5.8%

に減り、語り手ではさらに減っ

てわずか2.7%になっている。自らの視点で主体的に語り、世界観を打ち出す役柄を持つ黒人の登場人物がいかに少ないかをこの結果は物語っている(グラフ3)。

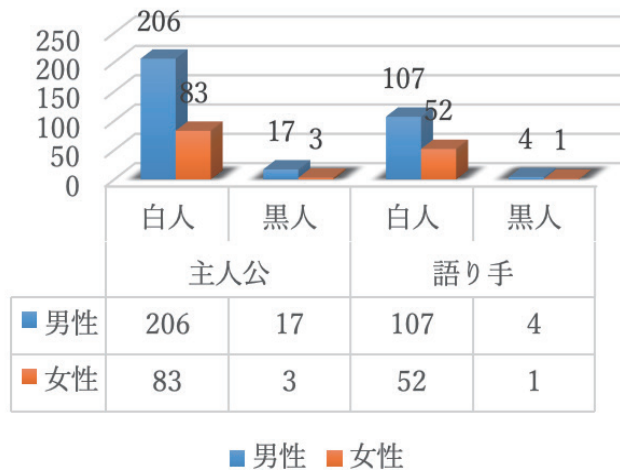
だが格差は人種間だけでなく、ジェンダー間でも生じる複合的なものであることもダルクスターニュの研究は示している。主人公は、男性の場合が白人と黒人それぞれ206人と17人であるのに対し、女性の場合は83人と3人であり、また語り手のほうも、男性の場合が白人と黒人それぞれ107人と52人であるのに対し、女性の場合はそれぞれ4人と1人になっている。つまり黒人女性はジェンダーと人種の二重で劣勢に立たされているのである(グラフ4)。

主人公と語り手における人種構成(第Ⅱ期)



グラフ3 (DALCASTAGNÉ(2014)に基づき、筆者が作成)

主人公・語り手の男女比



グラフ4 (表は DALCASTAGNÉ(2014)より転載、グラフはそれに基づき、筆者が作成)

8 Ibid., pp. 314-315.

1.2. 登場人物のプロフィール

ダルカスターニュは、登場人物のプロフィールについても調査をしているが、ここではとくに登場人物に設定されている職業がどれだけ人種間で異なるかを確認しておきたい。白人と黒人それぞれについて上位10種がまとめられたのが表1と表2である。白人の場合、1位が主婦、2位がアーティスト、3位が作家、4位が学生、その後、無職、教員・教授、ジャーナリスト・カメラマンと続く。対して黒人は、1位が強盗、犯罪者、2位が使用人・メイド、3位が奴隷、4位が風俗業で、その後ようやく主婦やアーティスト、学生が数パーセントの割合で登場する。ちがいは明らかだろう。ブラジルの社会階層は人種と密接に結びついているため、現実としてたしかに使用人やメイドの率は非白人のほうが白人より高い。それにしてもブラジルの現代小説にでてくる黒人の登場人物の5割が、強盗・犯罪者、使用人・メイド、奴隷、風俗業の従事者だというのは、あまりに公平性に欠けると言える。

登場人物の職業 (白人) 表1

	白人		
1	主婦	97	9.8%
2	アーティスト (演劇・映画・芸術・音楽)	84	8.5%
3	作家	69	6.9%
4	学生	68	6.8%
5	無職	63	6.3%
6	教員・教授	61	6.1%
7	ジャーナリスト・カメラマン	54	5.4%
8	不明	48	4.8%
9	商業	47	4.7%
10	bandido	32	3.2%

登場人物の職業 (黒人) 表2

黒人		
強盗、犯罪者	20	20.4%
使用人・メイド	12	12.2%
奴隷	9	9.2%
風俗業	8	8.2%
主婦	6	6.1%
アーティスト (演劇・映画・芸術・音楽)	6	6.1%
学生	5	5.1%
作家	4	4.1%
政治家	4	4.1%
物乞い	4	4.1%

DALCASTAGNÈ(2014), pp. 318-319.

またダルカスターニュの研究ではこれ以外にも年代や社会階層に関する分析もされており、そこからは黒人の登場人物に薬物依存者が占める割合が白人よりはるかに高く、それゆえに若年層も多いことが明らかにされている。

このようにアフロブラジル作家らが語りはじめた起点は、圧倒的に書き手も登場人物も白人が多く、また主体的な声を持つ語り手となるとさらにその傾向が強まるという極端に白人 (とりわけ白人男性) 偏重の文学の状況であった。したがってそこに打ち出される価値観や人生観は白人の世界のものであり、アフロブラジル人はまさにアフロブラジル作家のクチが言うように「蚊帳の外に置かれ」⁹、一方的にネガティブなステレオタイプを与えられるがままになっていたといっても過言ではない。アフロブラジル作家は、こうした不利な状況を打破するために立ち上がるのだが、それを見る前に、なぜこのような状態になっ

9 CUTI (2012) これについては後述する。

たのか、歴史的な背景を見ておこう。

2. ブラジル文学の形成の歴史的背景

2.1. 白人中心のブラジルの文学の形成と黒人のステレオタイプ化

ブラジルは1822年にポルトガルから独立し、近代国家になるべくナショナルな文化の構築に着手し、文学においても国民文学を打ち立てることがめざされた。当時のロマン主義作家らは、ポルトガル文学からの自立とヨーロッパ文学との差異化を模索し、着目したのが熱帯の自然とそこに暮らすインディオであった。ゴンサウヴィス・ジラス (Gonçalves Dias) の「イ・ジュッカ・ピラーマ (*I-Juca-Pirama*)」、ジョゼ・ジ・アレンカール (José de Alencar) の『イラセマ (*Iracema*)』、『オ・グアラニー (*O guarani*)』など、インディオをブラジル文化のシンボルに引き上げたインジアニズモと呼ばれる文学はこの過程で生み出されたものである。

だが、それは現実を反映していたものではまったくなかった。インディオは疫病や酷使や虐殺等によりその人口が激減しており¹⁰、わずか残存していた人々も内陸へ追いやられ、農場や都市で暮らしていたのは白人と黒人だったからである。それにも拘わらずブラジルのシンボルとしてインディオが選ばれたのは奴隷制度の存在に依るところが大きい。ブラジルは独立後も奴隷制度を維持し、廃止されたのはアメリカ大陸でもっとも遅い1888年であった。400年近くにわたる奴隷制度のもとで黒人イコール奴隷というイメージが定着し、どれだけ実生活で黒人の存在が大きな比重を占めようとも、黒人をブラジルのシンボルに選ぶことはとうてい考えられないことだったのである。

この結果、白人支配者層出身の作家らの作ったブラジル文学は黒人不在の白人世界となるか、あるいは黒人が描かれていたとしてもそこには白人支配層の持つイメージが投影された。登場した場合の多くは「奴隷」として脇役で登場し、付与されたイメージは「性悪な黒人 (*negro ruim*)」や「野蛮で本能的な黒人 (*negro selvagem, instintivo*)」、「マランドロ (*malandro* ≒ 無法者)」、「官能的なムラータ (*mulata sensual*)」といった西洋の自己認識の対極にある負のイメージか、あるいは「犠牲者としての黒人」 (*negro vítima*)、「黒人の乳母」 (*mãe preta*)、「屈従的な黒人 (*negro submisso*)」といった奴隷制を正当化するものであった¹¹。繰り返し使われる中でこれらはステレオタイプ化し、その名残が現代でも根強く残っている。ブラジル文学はその形成過程から白人の視点と白人の世界観が多分に織り込まれたものだったのである。

20世紀前半に興ったモデルニズモ運動では、それまでのヨーロッパ模倣の姿勢が改めら

10 ポルトガル人の到着時は300万から400万人いたが、19世紀初頭にはその20%の70万人ほどになっていたという。(GOMES 2019, p.118)

11 文学における黒人のステレオタイプについては、PROENÇA (2004)、CONCEIÇÃO (2009)、DUARTE (2013) など多くの文献に書かれている。

れて地元の文化に根ざす「ブラジルらしさ」が追究され、ブラジルのアフリカの側面に目が向けられたが、それでも状況は大きくは変わらなかった。たしかにアフロブラジル人を主演に据えた作品が書かれるようになり、そのこと自体は大きな一歩ではあったが、視点が白人のものであることには変わりなく、単にテーマが黒人やアフリカの文化になっただけというものが多かった。このような姿勢は「ネグリズモ」と呼ばれる。たとえばマリオ・ジ・アンドラーヂ (Mário de Andrade) の『マクナイーマ (Macunaíma)』はブラジルの文学史に必ず登場するモデルニズモを代表する作品だが、アフロブラジル人の作家や研究者から見れば、マクナイーマが魔法の水に入って肌を洗うと白くなる場面やチア・シアッタの家でマクンバを行なう設定はネグリズモであり、その根底には人種偏見と差別が横たわっているとの指摘がされている¹²。

こうしたいわゆる「カノン」の文学についてエドゥアルド・ジ・アシス・ドウアルチは次のように述べる。

そこには黒人作家がまったく不在であり、この事実は我々の[ブラジルの]文学を「白」と形づけるばかりか、ヨーロッパ中心的な基盤を持つ形式主義によって規定された批評的基準を参照することであり、それから外れる経験や声はその時代の質やスタイルの特定の基準に当てはまらないという理由で追放してしまう¹³。(〔 〕は筆者の補足)

ブラジルの文学は、こうした黒人排除のプロセスの中で白人化していったのである。

2.1.2. 声をあげはじめたアフロブラジル作家

以上からは、アフロブラジル作家らが立ったスタート地点はゼロどころかマイナスだったことがわかる。欧米やカリブでは20世紀初頭にニューヨークのハーレムルネッサンス、パリやカリブのネグリチュードといった黒人独自の文化を高揚する動きが興り、キューバでも詩人ニコラス・ギジェンを中心にアフリカ性を打ち出す黒人文学が展開された。ブラジルでも一部このような世界的な動きに感化された作家らもいたが、名称を冠するほどのまとまった動きにはならなかった¹⁴。この背景には、1933年にジルベルト・フレイレが『大邸宅と奴隷小屋』を著わし、ブラジルの異文化間・異人種間の混淆に肯定的価値を与えたのを機に、同時期に独裁体制を築いたヴァルガスがそれを国民統合のためのイデオロギーとして取り込んだことがある。それはやがて国内外に向けた「人種民主主義」の看板を冠し、人種間の調和と文化の混淆という公的な理想の構築につながった。このためブラジルでは

12 DUARTE (2013), p. 147.

13 Ibid., p. 146.

14 SEMONG (2016), p. 140. ジョゼ・ド・ナシメント・モラエス (Nascimento Moraes), リーノ・ゲジス (Lino Guedes), ブルーノ・ジ・メネーゼス (Bruno de Menezes), アロジージオ・ヘゼンジ (Aloísio Resende), ソラーノ・トリニダージ (Solano Trindade) などの詩人が声を上げた。

欧米のように早くから黒人運動が高まることはなかった¹⁵。人種民主主義はその後も 1964 年に成立した軍事政権によっても推進された。

だが 1970 年代に入って反軍事政権の動きが高まり民主化運動が起こると、それに合わせてマイノリティも権利を求めて声をあげるようになった¹⁶。アフリカ系の人々による運動としては 1978 年、アブジアス・ナシメント (Abdias Nascimento) によって反人種差別黒人統一運動 (Movimento Negro Unificado Contra a Discriminação Racial, 後に Movimento Negro Unificado - MNU) が結成され、同じ年に芸術分野でも運動がおこり、黒人文化芸術センター (Centro de Cultura e Arte Negra) がサンパウロに設立されている¹⁷。また文学では黒人の作家や詩人による文芸雑誌『黒人ノート (Cadernos Negros)』が創刊された。それまでまとまった黒人文学の運動がなかったブラジルで¹⁸ ようやくアフロブラジル作家たちが力を結集できる舞台が登場したのである。『黒人ノート』の発刊の意義は大きかった。出版の機会がなかなか得られなかったアフロブラジル作家らの発表の場を創出するとともに、個別に活動してきた黒人作家らに団結の機会を与えたからである。これによってアフロブラジル作家らは自らの文化や歴史に向き合うようになり、雑誌の掲載の可否を決める審美的基準も独自に確保しはじめた。それまで白人中心であった文学的環境で他者の基準の下で統制されていた出版業界に自分たちの居場所を創り出すことができたのである。

1980 年にはそのメンバーが中心となって文学グループ「キロンボージ (Quilombhoje)」がサンパウロで生まれた¹⁹。そしてこれを皮切りにリオデジャネイロでは 1982 年に「グルッポ・ネグリシア (Grupo Negrícia)」が、サルヴァドールでは「グルッポ・ジェンス (Grupo de Escritores Negros de Salvador-GENS)」(1985) が結成されるなど、さまざまな黒人作家グループが誕生した²⁰。

『黒人ノート』は毎年刊行され、その威力は数字にも表われている。グラフ 5 は、ルイス・エンヒッキ・シルヴァ・ジ・オリヴェイラ (Luiz Henrique Silva da Oliveira) とファビアーニ・クリスチーニ・ホドリゲス (Fabiana Cristine Rodrigues) の調査「小説と短編を通じたア

15 人種デモクラシーは、ブラジル人はだれも白人でも黒人でもない、全を *raça brasileira* とする。ジルベルト・フレイレは、1948 年、新聞『キロンボ』で次のように書いている。我々の間では、明らかにアフリカにルーツを持つ人々も自分のことを「アフリカ人」とか「黒人」とは感じず、ブラジル人と感じる。純粹に先住民系の人たちと同じくらいにブラジル人で、ポルトガル人の子孫と同じくらいにブラジル人だ。(…) 我々は見張っていないてはならない。血統であれ肌の色であれ、どんなルーツを持つブラジル人も、今日のブラジルを分断しようとする試みには立ち向かわなくてはならない。「白人」と「アフリカ人」、あるいは「ヨーロッパ人」、「先住民」、「褐色」、「黄色」と、あたかもアフリカ系の人々はここで敵を前にした新アフリカ人のような行動をとらなくえはならず、ヨーロッパ系の人々が野蛮人を前に文明的な新ヨーロッパ人のようにふるまわなくてはならないような状況を作ろうとする試みに。(Apud. DUARTE (2014), p. 22.)

16 『現代ブラジル論』、p.147.

17 PROENÇA (2004), p. 176.

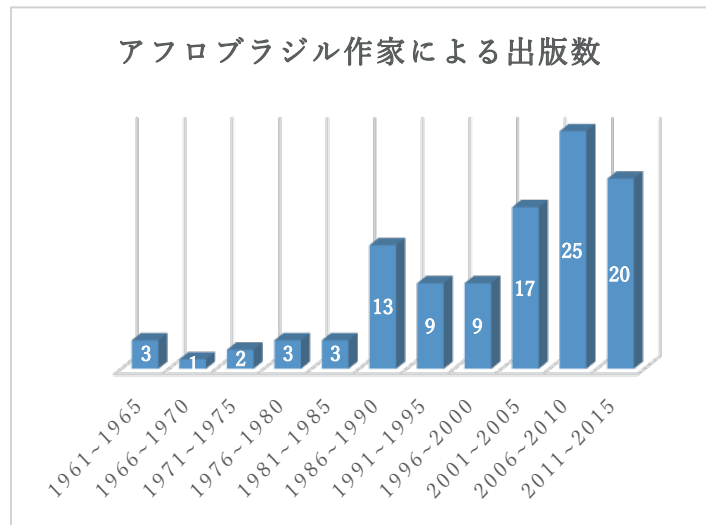
18 DUARTE(2014), p. 252.

19 設立メンバーは Cuti, Oswaldo de Camargo, Paulo Colina, Abelardo Rodrigues など。(Quilombhoje サイト)

20 PROENÇA (2004), p. 178.

フロブラジル文学出版のパノラマ」で挙げられている1859年から2015年までの作品のうち、1965年から2015年までの出版数を5年ごとにグラフで示したものである²¹。1980年代後半から劇的に伸びているのがわかる。

この伸びの背景には『黒人ノート』の創刊ばかりでなく、この間、黒人の中間層が増えたことや、2003年に法令10639号が制定され、初等・中等教育においてアフリカ系ブラジル人の歴史や文化の教育を義務化したことが追い風としてあったことは事実だろう。これによって発信の機会や読者数が増えたことは間違いない。だが、そうした社会の動きを逃さずしっかりと受け止め、実績に結びつけられたのは『黒人ノート』の地道な活動があったからというのかもしれない。



グラフ5 OLIVEIRA/RODRIGUES (2017) に基づき筆者が作成

3. 語りはじめたアフロブラジル作家たち

では、このように語り始めたアフロブラジル作家らは、何をどのように語ることでブラジル文学の白人偏重を打破し、黒人の地位向上をめざしているのだろうか。具体的な作品を通して見ていきたい。考察の対象とするゴンサウヴィスの『色の欠陥』、ヴィエイラ・ジュニオールの『曲がった鋤』、テノーリオの『皮膚の内側』は、それぞれ奴隷制度が敷かれていた時代のブラジル、現代のブラジルの地方、現代のブラジルの都会と、異なる時代と舞台を扱い、いずれも注目や話題を集めた作品である。

3.1. 語り直される歴史：『色の欠陥』

3.1.1. 『色の欠陥』

『色の欠陥』(2006) は、ブラジルで初めてディアスポラの歴史を当事者の視点で語り直した歴史小説で²²、2007年にはカサ・デ・ラス・アメリカ賞を受賞し、いまではアフロブラジル文学の古典とも言われる。947ページ(紙媒体)にわたる壮大な長編のあらすじを

21 OLIVEIRA/RODRIGUES (2017), pp. 92-94.

22 GONÇALVES & MADDOX(2011), p. 167.

要約することは至難の業だが、あえてまとめれば次のようになる。1810年にアフリカのダホメで生まれた主人公ケヒンデは双子の妹と祖母とともに囚われ、奴隷船に載せられるが、船中で祖母と妹の両方を亡くし、天涯孤独の身でブラジルに到着する。通常奴隷は強制的にカトリックの洗礼を受けさせられ、キリスト教の名前を付与されたが、ケヒンデは巧みにそれを逃れ、ルイーザという名前を擬装のためだけに通称として使う。バイーア州イタパリカ島のサトウキビ農場に売られ、農場主の娘の遊び相手の仕事を与えられる。利発なケヒンデは、娘が読み書きを習う際に自分も覚え、結果的にそれが彼女の人生の切り拓くための切り札となる。農場主に強姦され子どもを産まされたうえ嫉妬した農場主の妻からの辛い仕打ちにも遭うが、農場主が死ぬと（奴隷側の復讐により薬草で病死を遂げた）、農場を畳んだ妻といっしょに州都サルヴァドールに出る。妻はケヒンデを自分のそばには置いておきたくなくイギリス人宅にレンタルに出す²³。ケヒンデはそこでクッキーの作り方を覚え、その行商などで成功し、貯えた金で自由を勝ち取る。

ポルトガル出身の白人と愛し合い、子どもを一人授かるが、黒人であるために正式な妻にはしてもらえない。しかも子どもは、あろうことか、ケヒンデが1835年のマレの反乱に参画し敗けて身を隠しているあいだに、ギャンブルの借金を抱えた夫によりその返済のために売られてしまう。自由の身だったにも拘わらずである。白人が自分の奴隷だと言え、それが事実として通用する社会だったのである。ケヒンデは子どもを探してブラジル南部を廻るが、みつけれず、機会があったときにアフリカに帰還する。商才のあった彼女は、帰りの船の中で知り合ったイギリスの奴隷の子孫のムラートと結婚し、アフリカでも商売に成功する。だが年老いて目も見えなくなった後、どうしてもブラジルにおいてきた行方不明の子のことが忘れられず、もう一度その子を探しにブラジルへ渡るところで小説は終わる。この小説は、その子に宛てて船中で綴られた書簡という設定になっている。

3.1.2. 公的ブラジル史の補完

この小説の画期的なところは、ブラジルの歴史が、奴隷化された者の視点から語られていることである。ケヒンデは、マレの反乱に参画した歴史上の実在人物と言われるルイーザ・マヒンがモデルである。マヒンはブラジルの奴隷制廃止運動の重要な指導者ルイス・ガーマの母とも言われ、ガーマも実際に実の父親に奴隷として売られた経験を持つ。マレの反乱とは、1835年1月にサルヴァドールでハウサやナゴといったイスラム系奴隷が解放を求めて起こした反乱である。この反乱についてボーリス・ファウストは、19世紀初頭以降に奴隷の反乱がみられるようになったブラジルで「もっとも意義深い反乱」²⁴だとしている。またそのころのブラジルは、初代皇帝のペドロ一世がポルトガルへ帰還し摂政による統治が行なわれていたため政情が不安で、全国各地で反乱が起きており、このマレの

23 奴隷の労働形態は、農場での農作業や家事労働に従事するのみならず、路上で菓子などの食べ物を売る行商として働かされたり、第三者にレンタルに出されたりする形もあった。

24 ファウスト (2007), p. 194.

反乱もそのひとつとして扱われることもある。だが手許にある5冊の歴史書を見ると、この反乱は何らかの形で触れられているものの、同時期の他の戦争や反乱²⁵に比べると圧倒的に記述量が少ない。そのうちの3冊では反乱が起こった事実は記されているが、「マレの反乱」という名前までは書かれていない²⁶。このような反乱を小説のプロットの重要な位置に据え、実行した側の視点で計画から実施、そして敗走するまでを詳細に描いたことは重要である。

2003年にブラジルでは基礎教育でアフロブラジル文化および歴史の教育が義務化され、現在ではインターネットでは多くのサイトにこの反乱に関する詳細な記述がある²⁷。ゴンサウヴィスはその動きと歩調を合わせ、黒人たちにとって重要な歴史的な事件や運動に着目し、従来とは異なる視点を『色の欠陥』に差し挟むことで、ブラジルの歴史をより総合的なものにすることに一役買ったと言える。『色の欠陥』は、19世紀にヨーロッパによる征服史をベースとして作られた公式の歴史的言説のパラダイムを革新的に打ち破るひとつの挑戦なのである²⁸。

3.1.3. 公的な文学・思想言説への挑戦

同様の挑戦は文学そのものに対しても行われている。たとえば奴隷船の描写を見てみよう。奴隷船を題材にした代表的なブラジルの文学といえば、すぐに思い浮かぶのが奴隷制廃止論者のロマン主義詩人カストロ・アウヴィス (Castro Alves) の詩「奴隷船 (*O navio negreiro*)」である。奴隷船はここでは次のように描かれている。

25 ペルナンブーコのカバーノス戦争、パラのカバナージェンの乱、リオ・グランデ・ド・スルのファラーポス戦争、バイーアのサビナーダの乱、マラニャオンバライアーダの乱など。

26 歴史書5冊の記述は以下の通りである。①アレンカール (2003、原書の出版は1994) では第一帝政期の主な反乱としては挙げられていないが、帝政期にたびたび起こった黒人奴隷の反乱のひとつとして名前を挙げず「サビナーダの2年前にサルヴァドールで発生した。それは指導者たちが定期的に集まって細部まで綿密に計画された徹底した反乱」と記述。(pp.318-319) ②ファウスト (2007) 「もっとも意義深い反乱」とし9行にわたる記述がある。(p. 194) ③ゼンパチ (1983) 「暴動や革命の主なもの」のひとつとしているが、反乱名は記さず「まず最初は1835年、バイーア市の黒人による市街の焼討ち計画である。この企ては密かに準備していた段階で軍隊に襲われ、死者数名を出して潰され、未遂に終わったが、これは黒人の多いバイーア市を震え上がらせた事件であった。バイーア市にいた黒人はほとんどがハウッサーやナゴで、なかにはアラビア文字を読み書きできた者もあって、社会への反抗的な気持ちが強く、1807年以来、しばしば暴動を起こしていた」と記載。(p.167) ④山田 (1986) 同時代の反乱リストに奴隷蜂起として名は記載されているが、本文で名前は挙げられていない。奴隷制反対運動のひとつとしてパルマーレスの反乱とともに「1797年・1835年のバイーアの奴隷蜂起(計画)といった大規模かつ組織的形態をとる場合」と記述(p.105) ⑤金七 (2009) バイーアの反乱として名前を出さずに「バイーアではまったく性格の異なる二つの反乱が起こった。(…) いま一つは黒人奴隷ナゴ集団の反乱である。バイーアに集中していたナゴは自分たちの信仰を禁じられたことから内陸に逃亡してキロンボをつくった。1835年ナゴは反乱を起こし、イスラム教黒人政府を樹立しようとしたが、非イスラム教徒をすべて敵とみなしたため、ほかの奴隷たちから支援が得られず、政府軍によって殲滅された」と記載(p.110-111)。

27 たとえばRODRIGUES (掲載年不明) や NEVES (掲載年不明)。

28 GODOY(2020)

我々は海洋の只中にいる……帆を広げ
海風の熱い息吹の中を
ブリッグ型帆船が海の水面を走る、
つばめたちがうねりをかするように²⁹

この奴隷船は、実に雄大に誇らしげに大海を突き進んでいる。他方『色の欠陥』で描かれる奴隷船は対照的で、明かりや新鮮な空気を取り込む窓もなく、蒸せるような暑さの中で汗と汚物と潮の匂いが充満し不潔の極みにある船底である。積み荷として運ばれていく人間に船の全体像が見える由もなく、どれだけ想像力を俯瞰的に拡張させてもせいぜいできるのは「上からみたらきつと、身体と身体のあいだに隙間なく並べられた我々は、羊の皮でできた黒い広大な絨毯のようだろう」という描写である³⁰。出航の瞬間も上方から聞こえてきた汽笛の音で感知するしかない。カノン文学において白人が採用した外からの視点に、『色の欠陥』は内からの視点を付加しているのである。

またゴンサウヴィスが明らかに意識的に主流の歴史および文化的言説に挑んでいたことがわかる箇所がある。それはなかなか子を授からなかった農場主の妻が、夫の愛人の奴隷が妊娠したときに果たした復讐のエピソードである。妻はその奴隷を呼び出すと、膨らんだお腹をナイフで撫で始めた。とっさに子どもが殺されると思った奴隷は、子どもには罪はない、自分は直ちに農場を出て行き、二度と戻っては来ないから赦してほしいと懇願する。だが妻は、産んだ子を見られないのは悲しいことだろうと言い、奴隷の目の縁にナイフを突き立てると、ぐるりと一巡させ目玉をくりぬき、もう片方の目に対しても同様にした。だが事はそれだけでは済まなかった。なんと翌日の朝食で夫がデザートでゼリーを食べようとスプーンで掬うと、出てきたのはくり抜かれた眼球だったのである。

実はこのエピソードは、ジルベルト・フレイレが『大邸宅と奴隷小屋』の中ですでに次のように紹介しているものと一致する。

農園主よりもその夫人の方が奴隷を残酷に扱うというのは、奴隷制社会では一般に見られる事実である。(…) サトウキビ農園主夫人が無防備な奴隷に加えた虐待の例は、二つや三つどころか、枚挙にいとまがないほどである。美貌のムカーマの眼球をくり抜かせ、デザートのためにシロップ漬けの菓子の容器に入れ、鮮血の中に浮かべて夫の面前に運ばせたシニャー＝モッサ〔若奥様〕³¹。

つまりゴンサウヴィスは、フレイレが農場主夫人による奴隷の虐待として挙げた事例を

29 ALVES. 原文は *Stamos em pleno mar. . . Abrindo as velas Ao quente arfar das virações marinhas, Veleiro brigue corre à flor dos mares, Como roçam na vaga as andorinhas.*

30 GONÇALVES (2019), p. 33.

31 フレイレ (2005)、p. 80.

奴隷の視点から語り直し、その被害者と家族、そして周囲の人たちの苦悩や怒り、怨恨を詳細に綴っているのである。フレイレがたった1行あまりで済ませたエピソードが『色の欠陥』では147行に膨らんでいる³²。

フレイレは、つい最近までブラジルが標榜していた人種デモクラシーの確立に決定的な影響を及ぼした学者である。それまで西洋の視点で否定的に捉えられ、ブラジルの将来にとって悲観的な要因でしかなかった人種混淆を肯定したことから、それまでの人種観に画期的な転換が起こり、それが同時期に独裁体制を築いたヴァルガス大統領によって国家統合のためのイデオロギーに利用されたことはすでに述べた。そうしたフレイレに対するゴンサウヴィスの評価は厳しく、次のように述べている。

フレイレを読めば、すべてがそこに書かれていることがわかる。彼は「ほら、ブラジルにあった奴隷制は、そんなに暴力的ではなかったでしょ」と言いながら、でも強姦や逃亡や死亡や極度の暴力はあったと言っている。つまりフレイレは、どちらの前提も起点にして読むことができる。同意も不同意もどちらもできる。彼が書くものはほとんどすべて二つの、あるいはそれ以上の読み方ができる。彼は…、この言葉がいいかわからないが、私はそれらがフレイレのきわめて臆病・卑怯な (*covarde*) 姿勢だと思っている³³。

ブラジルの奴隷制が残酷であったともなかったとも、どちらにも解釈可能な「典型的なブラジル流書き方」をするフレイレを「臆病・卑怯」だと厳しい言葉で糾弾するのである。この小説を書くにあたりあえてフレイレを再読はしなかったが、「歴史を読んで〔当時の現実〕について考えたかった」³⁴と述べている。

3.1.4. ネガティブなイメージの転換

主人公のケヒンデについてダルカスターニユは、従来のステレオタイプで塗り固められていた黒人女性像に慣れていた読者にとっては「違和感」すら覚えたかもしれないと述べる³⁵。たしかに叙事詩を思わせるこの壮大な歴史小説に描かれるケヒンデをはじめとする奴隷たちは、ステレオタイプ化された従順な奴隷や性悪の奴隷のイメージとは対照的である。ケヒンデは勉強熱心で、遊び相手とされた農場主の娘の勉強の時間にいっしょに読み書きも覚えてしまう利発な女性で、常に経験から何かを学び取り、それを活かして成功に結びつける。どんな艱難辛苦も乗り越え逆境に打ち勝ち、自らの手で自由を勝ち取り、成功を収める強い女性である。屈從的な黒人は出てこず、奴隷のイメージが変わる。舞台が奴隷

32 行数は電子版で数えた場合のものである。

33 GONÇALVES & MADDOX(2011), pp. 172-173.

34 Ibid., p. 170.

35 DUARTE/FONSECA (2014), p. 326.

制社会である以上、乳母や愛人としての奴隷が出てくるのは致し方ないとしても、それが官能性や野蛮性などのステレオタイプと重なることはない。むしろ実の子どもを売り飛ばすという内縁の夫の行為によって、白人やポルトガル人のイメージの方が貶められている。

ここには黒人のイメージを覆す新しい文学の視点があり、ゴンサウヴィスがケヒンデを通して立ち向かったのは、白人中心の文学、そしてブラジルの公式の歴史だったのである。

3.2. 奴隷制の負の遺産：『曲がった鋤』

3.2.1. 『曲がった鋤』

先述したように『曲がった鋤』は2018年にまずはポルトガルでレヤ賞を受賞し、ブラジルでも翌々年の2020年にジャブチ賞とオセアーノ賞に選ばれ、同年の文学界では話題を独り占めにした感がある。まずはこの小説のあらすじを紹介しておこう。

舞台はバイーア州奥地のシャパーダ・ジアマンチーナにあるアグア・ネグラ農場である。そこは代々白人の不在地主が所有するサトウキビの大農場で、農民のほとんどが奴隷の子孫で、いまも住む権利と引き換えに労働を提供する奴隷同然の状態に置かれている。主人公の姉妹ビビアーナとベロニージアの父ゼカ・シャペウ・グランジは監理人に忠実に従い必要な指示命令を農民たちに伝達するまとめ役で、同時に土着宗教のジャレ教の祈祷師として集落の人々の病を治し、絶大な信頼を集めるリーダー的存在でもある。ある日、二人の姉妹を深刻な事件が襲う。祖母が大切にしている古い鞆の中身に強く興味を惹かれ、祖母の留守を見計らって鞆を開けてみると、中から刃が鮮烈な光を怪しく放つナイフが出てきた。二人は思わずその味を試してみたくなり、刃を舌に当て、取り合いになった拍子に二人とも舌を切ってしまう。ビビアーナは回復したものの、ベロニージアは永遠に言葉を失う。

あるとき農場に従兄のセヴェーロが越してきた。セヴェーロは土地が永遠に自分たちの所有にならないのに奴隷同然で働かされている現実に大きな疑問を感じ、それを周囲にも話す。共鳴したビビアーナはセヴェーロと駆け落ちし農場を出ていく。やがてセヴェーロは社会運動家に、ビビアーナは教員となって農場に戻り、農民たちを啓蒙しはじめる。改革を訴えるセヴェーロは農場主から危険視され殺害されてしまう。警察は捜査を開始したが、農場主との対立の事実を知るとただちに中止し、麻薬闘争絡みの事件として終結させてしまう。ビビアーナは夫の死の真相が歪められたことを看過できず、夫の後を継いで農民のリーダーとなる。農場主はビビアーナに対しても威嚇するが、最後は何者かによって殺害される。

3.2.2. 奴隷制廃止の欺瞞性

『曲がった鋤』は、人種偏見と差別、社会的不平等、労働搾取など、奴隷制度がブラジ

ル社会に残した深刻な負の遺産に焦点をあてる。ヴィエイラ・ジュニオールは大学で地理学を専攻した後、15年にわたり国立植民農地改革院 (Instituto Nacional de Colonização e Reforma Agrária – INCRA) に務め、そこでブラジルの根深い土地問題を目の当たりにした。この小説の舞台であるシャパーダ・ジアマンチーナのキロンボにも駐在し、土地譲渡の任務にあたった経験がある。キロンボ³⁶とは、もともとは逃亡奴隷が森の奥地や山岳地帯に逃げ込んで作った集落だが、現代でもそれに起源を持つ黒人共同体が多数存在している。1970年代に興った黒人運動とともにそこに住む人々の土地所有権を要求する声が高まり、1988年の憲法ではキロンボに対する土地所有権賦与が義務づけられた。ヴィエイラ・ジュニオールが担当したのはその業務であった。また現場で得た知見と併せてアフリカの民俗学で博士論文を執筆し、2017年にバイーア連邦大学で博士号を取得している。この小説はINCRAでの経験の賜物であり、それがなければその土地の人々の世界観や暮らしぶり、そして彼らの歴史や夢を濃密に『曲がった鋤』に描き込むことはできなかったと述べている³⁷。

この小説の時代設定は20世紀後半だが、アグア・ネグラ農場の労働実態はおよそ現代のものとは思えないものである。彼らに与えられている権利はただ一つ住むことだけで、しかも住居を建設するために許されている材料は土と屋根を葺くイグサだけで、石を使うことは禁止されている。非衛生的であるばかりか、大雨ごとに流される。医療へのアクセスはなく、頼るのは伝統的な民間療法で、子どもの死亡率も高く、出産も産婆頼みであるため危険と隣り合わせである。父親のゼッカが生まれたときは奴隷制廃止からすでに30年が経っていたにも拘わらず、母親のドナーナは臨月になっても仕事を休むことを許されず、ゼッカが産声をあげたのはサトウキビ畑の中だった。また舌を失ったベロニージャは病院でリハビリさえ受けられれば話せるようになったはずだったが、通院できずに言葉を失った。住民のほとんどが非識字者で、まともな学校はなく、ようやくゼッカの訴えにより市長の治療と引き換えに設置されたが、引き続き子どもは労働力の一部だった。一家総出で働き、男は農場主のプランテーションでの労働を強要され、女性と子どもは自宅の裏庭の畑を耕す。搾取されるのは労働ばかりではない。本来差し出す義務のない自宅でとれた作物までが没収された。

土地問題に限らず経済的な格差や人種差別といった現代のブラジルの社会問題の原点を遡れば、もちろん行きつくのは奴隷制度だが、その廃止のあり方に問題があったことも大きな要因である。制度が廃止された際に解放奴隷らへの支援はまったくなく、何の賠償も保障も援助もないまま元奴隷たちは社会に放り出された。解放されたものの社会統合への方策がとられなかったため彼らは奴隷同然の暮らしをそのまま受け入れるか社会的周縁に追いやられるかしかなかった。奴隷制はたしかに紙の上では廃止されたが、実態としては未完であり、ヴィエイラ・ジュニオールがこの小説に書き込んでいるのはこうした深刻で根深い奴隷制の負の遺産である。彼はいくつかのインタビューで次のように述べている。

奴隷的な関係はブラジルの農地で今も存在している。(…) 原因は未解決の奴隷制とい

36 Fundação Cultural Palmares, 金七, p. 48.

37 GABRIEL(2019)

う我々の過去にさかのぼる³⁸。

ブラジルは一度も農地改革を行なっておらず、それは社会問題として続いている。為されたことは1850年の土地法の制定で、それにより金で買える人は土地を手に入れられたが、奴隷化された労働者や土着の共同体のインディオや小農民らは何も手に入れられず、いまに至るまで非正規か奴隷同然の境遇で働き続け、時代を通してそれらの人々は冷遇され激しい闘争の中で生きている³⁹。

[奥地で勤務したときに出会ったのは] 奴隷制と類似のシステムのもとで暮らす家族全員が労働者の家族だった。(…)あの時代で止まってしまった時代錯誤のブラジルだった。その私の驚きとそのショックを共有したかった⁴⁰。([]は筆者の補足)

3.2.3. 女性の力

この小説の登場人物には女丈夫が多い。主人公のビビアーナとベロニージアはいずれも芯が強く逆境に屈しない。ビビアーナは、すでに述べたように農場の住民が置かれている状況に疑問を抱き、村を出て苦学の末教員となって戻り、夫セヴェーロが殺害された後は人々の奴隷状態からの解放と権利を求める運動を引き継いで先頭に立った。ベロニージアも言葉は発せないが気丈さでは負けていない。酒浸りの夫トビマスから物同然に扱われ家庭内暴力にも遭ったが、プライドを持ちこたえ泣き寝入りすることはなく毅然とした態度を通した。夫は家を避けるようになり、外で飲んだくれては喧嘩をするようになり、最後は路上で死んだ。いわば夫を撃退した形である。圧巻はベロニージアがやはり夫の暴力に苦しむ近所の女性を守った一件である。ある日、救済を求めてきたその女性の家に乗り込み、ナイフをつきつけ脅し、退散させたのである。

実はそのときに使われたナイフは彼女の舌を奪ったのと同じもので、そのナイフはこの小説の横糸としてたびたび登場する。もともとは祖母が、ひもじい思いをしている子どもたちに何か買ってやれればと思い、働いていた農場で盗んだものだった。だが足がつくことを恐れて売ることができずにいるうちに愛着が湧き、手許においたままになった。そしてそれは祖母によっても男の暴力を撃退するために使われている。ある日娘が義父から虐待を受けていることを知り、娘を救うために夫をそれで始末したのである。ナイフは、多少の色の変化はあれ、血糊を残し、経年劣化せずに錆びることなく永遠の輝きを放っている。つまりそれは、根強いマシズモと奴隷制の二重苦を抱えるブラジルの女性が延々と孕み続けてきた怨恨の象徴といってもよいのかもしれない。

38 VEIGA(2021)

39 VIEIRA (発行年不明)

40 GABRIEL(2019)

女性の強さは小説の中だけではなく、ヴィエイラ・ジュニオールによればブラジルの女性は実際に強いという。「私の家では女性が主人公として大きな役割を持っている。男たちは常にその陰におり、主役は彼女たちだと思う。(…) 女性たちは家の外では声を持っていないが、中では統治している」。女性たちは社会で声を持っていないため、「私にとってはその物語を書くことが根本的に重要であり、それこそが小説に描き込みたかった」⁴¹。「現代ブラジル文学には信じられないことが起こっており、私の意見では、男性の中流白人作家の臍と問題の周りをぐるぐる回るオートフィクションの行き過ぎがある。それでは飽きてしまう」⁴²と述べている。やはりヴィエイラ・ジュニオールにも白人男性中心の文学に欠けているものを補完しようという意図があったのである。

3.2.4. 新しい世代に託される希望

このようにアグア・ネグラの若い世代は奴隷制の負の遺産に屈したままではない。父親のゼッカの世代は、住まいはいただいているものと考え、その恩を忘れてはいけなと、地主や監理人に忠実に働いた。だが古い世代のゼッカがこの世を去り、村のリーダーは新しい世代のセヴェーロ、そしてビビアーナに引き継がれた。着実に世代交代が進み、それとともに批判的な社会意識と改革への意思が芽生えた。ビビアーナの弟ゼゼは父親に「どうして僕たちもこの土地の地主じゃないの？ ずっとここで生まれて働いてきているのに。どうしてペイショット家は農場に住んでいないのに地主なの？ どうしてこの土地は僕たちのものにならないの？」⁴³と訊ねる。ベロネージアは、新設された学校で習う公式の歴史について、それは「なぜ私たちがそこにいる、私たちの親がどこから来たのか教えてくれないし、彼らが何をしていたかも教えてくれず、教科書に出てくるのは兵士、教授、医師、判事だけ」⁴⁴で嘘だらけだと疑問を抱く。そして不自由な舌を克服し言葉を取り戻そうと訓練を重ねる。興味深いのは発話練習のために彼女が選んだ言葉が“arado”（鋤）だったことである。何度も口に出して懸命に発話しようと努力するが、発せられるのは「曲がって、ゆがんだ鋤」⁴⁵だけで、どうしても正しい発音はできない。土地と耕作にまつわる誤った負の遺産を背負わされていることの象徴であろう。ところでナイフはポルトガル語で、銃器の *arma de fogo*（火器）に対し *arma branca*（白い武器）という⁴⁶。ベロネージアが舌をナイフで失ったことは、白人によって言葉を奪われてきた人々を寓意しているとも読み取

41 VIEIRA (発行年不明)

42 GABRIEL (2019)

43 VIEIRA JUNIOR (2019) p. 185.

44 Ibid., p. 99.

45 Ibid., p. 27.

46 CARNEIRO (2021).

れる。そしてビビアーナが教師として学校で教えたのは公式の歴史ではなく、なぜ自分たちが「町の保健所や市場や登記所に行ったときに偏見にあわなくてはならないのか」、そんな疑問に答えてくれる「悲しいが、美しい」「黒人の歴史」⁴⁷ だった。

彼らは土地を獲得するための知識と術も身につけた。先述したように 1970 年代に興った黒人運動とともにキロンボの土地所有権を要求する声が高まり、1988 年の憲法でキロンボに対する土地所有権賦与が義務づけられた。セヴェーロとビビアーナはそれを受けて村人にキロンボとしての誇りを説いた。セヴェーロが撒いた一粒の麦が確実にアグア・ネグラの地で何倍にもなって実を結びつつある可能性が示唆されて『曲がった鋤』は終わる。

3.3. 黒人としての自覚の始まり：『皮膚の内側』

3.3.1. 『皮膚の内側』

最後に取り上げるテノーリオの『皮膚の内側』(2020) は、黒人の父親を警官に誤って殺された息子ペドロが遺品を整理しながら亡父の軌跡をたどり、なぜ何の罪もない父親が殺されなければならなかったのかを問い、その過程で黒人としてのアイデンティティを改めて自覚する小説である。特徴的なのは父親の行動を言うときに終始主語に *você* (あなた) を使っていることである。これによりペドロが父親との対話を通して結論を導いていく姿が明確になるばかりでなく、読者が主語の「あなた」が使われるたびに、あたかも自分に対して語られているような気になり、語りへの参画が促されることである。

まさに Blacks Lives Matter 運動が世界中に燃え広がるきっかけとなったジョージ・フロイドの事件を思い出させる物語設定だが、小説自体はそれより前に書かれており⁴⁸、米国の動きに触発されて書かれたわけではない。ブラジルでもこの問題が同じくらいに深刻なのである。黒人が殺人の犠牲者になる割合は非黒人に比べ圧倒的に高く、2018 年の黒人の殺人被害者は実に全体の 75.7% にのぼるといふ。しかもそれは悪化傾向にあり、2008 年から 2018 年までの 10 年間に、非黒人の被害者数が 12.9% 減少しているのとは対照的に、黒人のほうは 11.5% 増加している。この小説の場合、殺されたのは男性だが、女性の状況はさらに深刻で、同じ 10 年間に非黒人女性の 11.7% 減に対し、12.4% 増となっている⁴⁹。とくにこの小説の舞台であるリオグランデドスル州の州都ポルトアレグレは、約 8 割が白人であるだけに人種差別は浮き彫りになる。

47 Ibid., p. 243.

48 MARQUES (2020)

49 Globo G1 (2020)

3.3.2. 黒人としての自覚

人種問題は経済格差、そして家族関係にも波及する。『皮膚の内側』のペドロもそれゆえに複雑化した家族関係の中で育ち、両親が離婚したために父親とはあまり接する機会がなく育った。だが振り返ると時々会う父は、彼が小さいころから黒人であることの自覚を教え諭そうとしていたことに気づく。前途に待ち受ける困難を克服できるように父親は早くから息子に現実を示し、心構えを持つよう導きを与えてくれていた。たとえば次の個所はペドロがそれを思い出す場面である。先述したように「あなた」は父親のことである。

あなたはいつも黒人は闘わなくてはならないと言っていた。なぜなら白人の世界は我々からほとんどすべてを奪ってしまっているから、我々に残っているのは考えることだけだ。内側をだいにしろ、あなたはそう言った。だれも見えない内側を。なぜならもうすぐにも皮膚の色が我々の体を貫いて、この世界でのあり様を決定してしまうから。⁵⁰

子どものときにペドロは父親から「おまえの皮膚の色は？」と訊かれたが、答えられなかった。すると父親は「黒人」だと言い、人種主義の存在を教えてくれた。だが当時のペドロにはまだそれが何を意味するのかがわからなかった。今こうしてかけがえのない父親を失ってみると、しかもただ黒人だという理由だけで殺された現実を目の当たりにすると、改めて黒人とは何かを問わずにはいられない。父親の過去を振り返ると、父の人生にはすべて皮膚の色が関わっていた。寡黙で内気な性格になったのも皮膚の色と関係があるにちがいない。父親は「サバイバルのためのマニュアル」⁵¹として注意すべき行動を教えてくれた。黒人が大きな声で話すと周囲が驚くから大声で話さないこと、道で白人の後ろを長時間歩かないこと、警察に職務質問されたときにはいきなり荒々しい振る舞いはしないこと、証明書を持たずに歩かないこと、浮浪者にはならないこと、常に職業を持っていること、これら黒人の「心得」を教えてくれた。ペドロは皮膚の色が父親より若干薄いため職務質問は2回しか経験がないが、父は7回もされた。ペドロはそれらをひとつひとつ思い起こす。検問の際、隣にいた白人にはおとがめがなかったのに、黒人である父親だけは対象にされたことや、自宅を訪ねた友人が留守だったので外で待っていたら、それだけで不審がられたこと、そして職務質問後、疑いが晴れても警官は謝りもしなかった。黒人ならば当然のことで許されるという社会通念があるからであった。ペドロは父親の教えを追想しながら黒人としての自覚を新たにしていくな。父親の過去の再構築を通して探るのは黒人である自分のあり方であり、ブラジルの社会で黒人であることの意味である。

3.3.3. 黒人であることの気づき

50 TENÓRIO (2020), p. 55.

51 Ibid., p. 83.

当然人は、生まれたときから差別を認識しているわけではない。物心ついたその瞬間であれ、世の中に差別があること、ましてや自分がその対象であるとは思ひもしない。いつの時点からか、何らかの経験をきっかけに世の中には差別というものが存在し、自分が被差別者であることを自覚する。黒人は、どこかの時点で自分が黒人であることに気づき、わきまえることを覚えていく。この小説にはペドロの父親の経験を通してその気づきのはじまりが克明に描かれている。

はじまりはジュリアーナという白人女性との恋愛体験だった。ジュリアーナと手をつないで歩くと周囲から好奇の視線が注がれた。ジュリアーナは友人から交際相手について黒人ならサンバやサッカーがうまいだろうとか、彼のアレは大きいかといったステレオタイプをぶつけられた。最初のうちは二人とも、愛は皮膚の色を越えると考えて気にしなかった。他方、父親が一人で入れれば冷たくあしらわれる店も、ジュリアーナと行くと態度が急変することに気づき、ジュリアーナはいわば通行証明書のようなになった。また彼女の家に行ったときに「ネガオン」という黒人に対する呼称で呼ばれ、当初は愛称だと受け流し、黒人をまたばかにする笑い話にもつき合っただけで笑っていたが、次第に気に障るようになった。皮膚の色はいつしか二人の関係にも忍び寄る。互いに「メウ・ネグロ（私の黒人）」、「ミーニャ・ブランキーニャ（私の白ちゃん）」と皮膚の色で呼び合いはじめ、すぐに皮膚の色はベッドにも侵入し、「美しく繊細で政治的だった色はいま彼らを興奮させるようになった。一連の人種的言説は急速にエロティシズムに変容した」⁵²。人種は関係がないと言っていた二人だったが、愛はついに「人種によって条件づけられ測れるようになった」⁵³のだった。

父親の気づきにとって決定的だったのは予備校である教師と出会った。「人種」という概念がどのように作られ、どのように政治的利用されたのかを教師から教えられたのである。最初はドイツのブルーメンバッハがコーカシアン（白人）、モンゴリアン（黄色人）、マラヤン（褐色人）、エチオピアン（黒人）、アメリカ・インディアン（赤色人）に分けたのにはじまり、ゴビノーがそれを政治に結びつけ、人種の言説は奴隷制度の正当化に利用されたことを知った。このことはジュリアーナとの関係にも暗雲をもたらした。父親の人種意識は次第に鋭くなり、何かにつけて人種を口にするようになり、そんな父親に対しジュリアーナは「あなたにとってはすべてが人種差別になってしまうのね」⁵⁴と言った。二人はもう以前のように純粋な気持ちでつきあうことができなくなり、破局を迎えてしまう。だが父親は大泣きをした。なぜならまだジュリアーナを愛していたからである。人種を抜きに人間関係、しかももっとも原初的な次元の人間関係すらも築けない現実、それがこの小説には差別される側の視点から描かれている。皮膚の色はすべてに関わってくる。この小説には、差別や偏見に苦しむ黒人の皮膚の内側が大きな深みを以て語られている。

52 Ibid., p. 23.

53 Ibid., p. 23.

54 Ibid., p. 28.

むすび

三冊の小説に共通するのは、そもそもなぜ、いつから自分たちの苦しみが始まったのか、苦悩の原点を追究する姿勢である。その原点を『色の欠陥』では大西洋横断奴隷貿易に遡って歴史を書き直し、『曲がった鋤』では現代の土地問題、不平等、経済的格差、人種問題の元凶ともいえる奴隷制廃止のあり方に求めている。そして『皮膚の内側』では人種問題が人間の内側にまで浸透し人間形成にまで影響する過程を、そのはじまりから詳細に振り返っている。いずれのアフロブラジル作家も自分たちの苦悩のはじまりをはじまりに遡ることで語りはじめたのである。

フレイレの人種デモクラシーの言説のもとで黒人を取り巻くあらゆる社会問題を煙に巻いた公的な歴史的言説に反感を抱くアフロブラジル作家は少なくない。ブラジルの黒人運動を代表するアビジアス・ナシメントは次のように言う。

混血は課されたもの、権力を持っている側の力業だった。奴隷化されたアフリカ人はブラジルの土地に來たいかどうか相談されたことはなかった。とにかく堅忍不拔の精神で耐え抜くしかなく、女性たちがどのように扱われたかは周知のとおりだ。知られているように彼女たちは植民者らと性関係を持つように強要された。そのことからわかるのは、この混血という歴史が真のはじまりから語られる必要があるということ、そしてそれは奴隷化されたアフリカ女性たちに対するポルトガル人の主人の蛮行だった。もしジルベルト・フレイレが扱った時代を奴隷化されたアフリカ人奴隷の視点から書き直したら、歴史は相当に違ってしまおうと思う⁵⁵。(傍点は筆者)

ゴンサウヴィスがしたことはまさにこの「ジルベルト・フレイレが扱った時代を奴隷化されたアフリカ人奴隷の視点から書き直」すことだったのだろう。

これらの小説が語る歴史は、個を超越し集団のものでもある。ポルトガル語という植民者の言語のなかで生み出されたマイノリティ文学としてのこれらの小説は、たとえ個人の物語であってもすべてが政治的になり、集団的価値を帯びる⁵⁶。ゼッカ家の歴史はアグア・ネグラの歴史であり、またブラジルで奴隷化された人々の子孫の歴史であり、ブラジルのメトニミーである⁵⁷。

しかしだからといって、これらの作品に白人や白人中心に作られた伝統と対立する戦闘姿勢が感じられないことを見落としてはならない。たとえばヴィエイラ・ジュニオールはあるインタビューに答えて次のように述べている。

社会的なテーマの議論に貢献しようとする意図は文学にはなく、むしろあまりにも多様

55 DUARTE/FONSECA (2014), p. 23.

56 ドゥールズ／ガダリ (宇野訳) (2017)、pp. 28-30.

57 RODRIGUES (2021)

な現実⁵⁸に光を当てて我々に共感の余地を与え、人類の問題について考えるよう仕向けてくれる⁵⁸。

ヴィエイラ・ジュニオールはジョルジ・アマード (Jorge Amado)、エリコ・ヴェリッシモ (Erico Veríssimo)、グラシリアーノ・ハーモス (Graciliano Ramos) といった地方主義文学に着想を得たことを明らかにし⁵⁹、過去に読んだ作家としてはそれ以外にジョゼ・リンズ・ド・ヘーゴ (José Lins do Rego) やハケウ・ジ・ケイロス (Raquel de Queiroz) を挙げている⁶⁰。事実『曲がった鋤』にはアマードの『果てなき大地』を思わせる個所がいくつかある⁶¹。またアマードに大きな影響を受けているのはゴンサウヴィスも同様で、『色の欠陥』の着想はアマードの『バイーア・ジ・トードス・ウス・サントス (Bahia de Todos os Santos)』からも得たという⁶²。すなわちこれらの作家らは、これまでのブラジルの歴史や文学の伝統を否定しているわけではなく、それらを土台とし、アフロブラジル人の視点を付加することで多様化し補完しているのである。人種主義的な文化は、人種差別や偏見の維持と再生産につながる。だからこそ伝統的な文化の変革にアフロブラジル作家らは取り組んでいるのである。

最後にこの3冊を通して見えてくることを2点挙げておきたい。一つはアフロブラジル宗教が共同体の紐帯と登場人物たちにとっての心の拠所として大きな意味を持っていることである。ケヒンデは川の女神オシュンに絶えず助けられ (『色の欠陥』)、アグア・ネグラの村はアフロブラジル宗教のジャレ教が人々を守り結びつけている。そして『皮膚の内側』のペドロも、最後は父が持っていた戦いの神オグンの守り石を譲り受けて差別や偏見に立ち向かう決意をする。いずれの作品においてもアフロブラジル宗教はアフリカ系ブラジル人を結びつけ、支えるよすがとなっている。中でも宗教の存在がひととき目立つのが『曲がった鋤』である。この小説は三部構成になっていて、それぞれに異なる語り手が設定されている。第一部と第二部はそれぞれビビアーナとベロニージャだが、第三部の語り手はなんとジャレ教の精霊サンタ・ヒタ・ペスカデイラなのである。人間であるビビアーナとベロニージャには当然のことながら語れる内容に限界があるため、二人の視点で語り切れなかった村の歴史の全容を精霊が補っているのである。しかも精霊は単に語るに留まらず村の歴史に直接関与する。というのもビビアーナを脅した農場主を殺害したのは、どうやら精霊の仕業のように読みとれるからである。たしかに地主に止めを刺し、死体を放り込

58 CORRÊA/SANTOS(2020)

59 Ibid.. また NOVA (2021) は着想を得た作品として *Vidas secas*(Graciliano Ramos), *O Quinze* (Raquel de Queiroz), *Terras do sem-fim* (Jorge Amado), *Menino de Engenho/São Bernardo* (José Lins do Rego) を挙げている。

60 VIEIRA (発行年不明)

61 たとえばアグア・ネグラの地にダイヤモンド目当てで最初に部隊を引き連れて乗り込んだ大佐の名がオラシオであることや新しい地主の妻がエステーラという名前であること、そしてそのエステーラが夫を殺され狂ったように泣き叫んで農場に駆け出して行った姿は、奥地の「野蛮な」現実⁵⁸に気が狂わんばかりに怯えるオラシオの妻エステルを髣髴させる。

62 GONÇALVES & MADDOX(2011), p. 177.

む穴を掘ったのはビビアーナとベロニーシアだった。だが彼女たちはそれを無意識のうちに行なっている。ビビアーナは夜、寝ているあいだに起きだして穴を掘りに行ったが、朝目が覚めたときになぜ手が痛いのか、なぜ豆ができているのかわからない。つまり彼女たちの行動の背後にはサンタ・ヒタ・ペスカデイラの働きかけがあったのである。アフロブラジルの人々にとって精霊は見守るばかりでなく歴史を司るほどの存在である。

もう一つは文字を知ること、そして教育の重要性である。『色の欠陥』のケヒンデは読み書きを覚えたことで成功を手にし、その重要性を語りの中でも強調している。『曲がった鋤』でビビアーナは教師となって村に帰ってきたし、学校も父親ゼッカが市長と交渉して建設を約束させた。なかなか約束の実行に移さない市長に履行を迫ったのはジャレの祭事で憑依した精霊サンタ・バルバラであった。そして『皮膚の内側』のペドロの父親も教師であった。不良生徒ばかりの夜間の学校で一時は学級崩壊状態に陥り絶望感を味わうが、殺される直前の授業ではドストエフスキーの『罪と罰』を教材に生徒たちに勉学への関心と呼び覚ますことに成功していた。教育こそが自分たちの解放と地位の向上と成功を得るための重要なツールだというメッセージがこれらの小説からは読み取れる。

アフロブラジル作家らが意識的に期待をかけるのは、自分たちと同じルーツを持つ読者に作品を読んでもらうことである。クチは、「国民文学という偉大な亡霊の前にして黒人読者が経験してきたことは、まるで白人同士の会話をドアの背後で、外から聞く人のものと同じだ」として、今こそ黒人による文学を黒人の読者に宛てて書き、「蚊帳の外にいる“白人”読者に違和感を味わわせる」⁶³ 必要があると述べている。アフロブラジルの人々に向けて書き、アフロブラジルの読者が増えること、それこそが彼らの望みなのである。

参考文献

- ALVES, Castro (掲載年不明) "Navio negreiro". <http://www.dominiopublico.gov.br/download/texto/bv000068.pdf>
2021/09/18 閲覧.
- BORIS, Fausto (2007) . *História do Brasil*. São Paulo: Editora da Universidade de São Paulo.
- CONCEIÇÃO, Evaristo (2009). "Literatura negra: uma poética de nossa afro-brasilidade". *Scripta*, v. 13, n25, pp. 17-31. <http://periodicos.pucminas.br/index.php/scripta/article/view/4365> 2020/9/20 閲覧
- CUTI (2012). "O Leitor e o Texto Afro-Brasileiro", *vinteculturaesociedade: Uma perspectiva negra*. Novembro 22, 2012. <https://vinteculturaesociedade.wordpress.com/2012/11/22/o-leitor-e-o-texto-afro-brasileiro/> 2020/8/26 閲覧
- DALCASTAGNÈ, Regina (2014) . "A personagem negra na literatura brasileira contemporânea" in *Literatura e afrodescendência no Brasil: Antologia crítica Vol.4 História, Teoria, Polêmica*, Belo Horizonte: Editora UFMG, 2014.
- DUARTE, E. de A. (2013). "O negro na literatura brasileira". *Navegações*, 6(2), pp. 146-153. Recuperado de <https://revistaseletronicas.pucrs.br/ojs/index.php/navegacoes/article/view/16787> 2021/5/9 閲覧

63 CUTI (2012)

- DUARTE, Eduardo de Assis / FONSECA, Maria Nazareth Soares (Org.) (2014). *Literatura e afrodescendência no Brasil: Antologia crítica Vol.4 História, Teoria, Polêmica*, Belo Horizonte: Editora UFMG, 2014.
- GOMES, Laurentino (2019) . *Escravidão: do primeiro leilão de cativos em Portugal até a morte de Zumbi dos Palmares, volume 1*. Rio de Janeiro: Globo Livros.
- GONÇALVES, Ana Maria and MADDOX, John (2011) . “Inspiração e Viagens Através Da Diáspora: Uma Entrevista Com Ana Maria Gonçalves.” *Afro-Hispanic Review*, vol. 30, no. 2, 2011, pp. 167–180. JSTOR, www.jstor.org/stable/23617167 2021/8/9 閲覧
- GONÇALVES, Ana Maria (2011) . *Um defeito de cor*. Rio de Janeiro • São Paulo: Editora Record. (インターネット公開 PDF 版) https://files.cercomp.ufg.br/weby/up/1154/o/Ana_Maria_Goncalves_-_Um_Defeito_de_Cor.pdf?1599239000 2020/9/12 PDF 入手
- Instituto Brasileira de Geografia e Estatística (2007). “Estudos sociodemográficos e análises espaciais referentes aos municípios com a existência de comunidades remanescentes de quilombos - Relatório técnico preliminar”. Rio de Janeiro, Agosto de 2007. <https://www.gov.br/mdh/pt-br/centrais-de-conteudo/igualdade-racial/estudos-sociodemograficos-e-analises-espaciais-referentes-aos-municipios-com-a-existencia-de-comunidades-remanescentes-de-quilombos-relatorio-tecnico-preliminar-ibge> 2021/10/3 閲覧.
- OLIVEIRA, Luiz Henrique de / RODRIGUES, Fabiane Cristine (2017) . "Panorama editorial da literatura afro-brasileira através dos gêneros romance e conto", Em Tese, [S.l.], v. 22, n. 3, p. 90-107, out. 2017. ISSN 1982-0739. Disponível em: <http://www.periodicos.letras.ufmg.br/index.php/emtese/article/view/11269> 2021/3/5 閲覧
- PROENÇA, Filho, D. (2004). “A trajetória do negro na literatura brasileira ”, *Estudos Avançados*, 18(50), p. 161-193. Disponível em: <https://www.revistas.usp.br/eav/article/view/9980> 2021/5/4 閲覧
- SEMONG, Éle (2015). "Literatura afro-brasileira e superação do racismo", I Feira Literária Brasil-África (FLIBAV) - Feira Literária BrasilÁfrica Vitória, Espírito Santo , 3 e 14 de novembro de 2013, Universidade Federal do Espírito Santo, *Revista Australirica*, Vol. 1, Nº 1, fevereiro de 2015, <https://revistascientificas.ifrj.edu.br/revista/index.php/australirica/article/view/444/295> 2021/12/17 閲覧
- TENÓRIO, Jeferson (2020) . *O avesso da pele*. São Paulo: Editora Schwarcz.
- VIEIRA JUNIOR, Itamar (2019) . *Torto arado*. São Paulo: Todavia.
- アマード、ジョルジ (武田千香訳) (1996) . 『果てなき大地』、新潮社.
- アレンカール、シッコ／カルピ、ルシア／リベイロ、マルクス・ヴェニシオ (東明彦／アンジェロ・イシ／鈴木茂訳) (2003) . 『ブラジルの歴史— ブラジル高校歴史教科書』 (世界の教科書シリーズ)、明石書店 .
- アンドウ・ゼンパチ (1983) . 『ブラジル史』、岩波書店.
- 金七紀男 (2009) . 『ブラジル史』、東洋書店.
- テルズ、エドワード・E (伊藤秋仁。富野幹雄訳) (2011) . 『ブラジルの人種的不平等— 多人種国家における偏見と差別の構造』、明石書店.
- ドゥルーズ、ジル／フェリックス・ガダリ著 (宇野邦一訳) (2017) . 『カフカーマイナー文学のために〈新訳〉』、法政大学出版局.
- フレイレ・G.(2005) (鈴木茂訳) . 『大邸宅と奴隷小屋 下』、日本経済評論社 .
- 堀坂浩太郎・子安昭子・竹下幸治郎共著 (2019) . 『現代ブラジル論— 危機の実相と対応力』、上智大学出版 .
- 矢澤達宏 (2019) . 『ブラジル黒人運動とアフリカブラック・ディアスポラが父祖の地に向けてきたまなざし—』、

慶應義塾大学出版会.

山田睦男編 (1986). 『概説ブラジル史』、有斐閣選書.

WEB 記事・インタビュー

ANJOS, Anna Beatriz". Itamar Vieira Junior e seu "Torto Arado", uma declaração de amor à terra", Agência Pública, 4 de fevereiro de 2021. <https://apublica.org/2021/02/itamar-vieira-junior-e-seu-torto-arado-uma-declaracao-de-amor-a-terra/> 2021/8/8 閲覧.

CORRÊA angelo Mendes / SANTOS Itamar (2020). "Itamar Vieira Junior: as muitas vidas na literatura", São Paulo Review, 8 de maio de 2020. <http://saopauloreview.com.br/itamar-vieira-junior-as-muitas-vidas-na-literatura/> 2021/5/25 閲覧.

EVARISTO, Conceição (2018). Conceição Evaristo: 'A literatura está nas mãos de homens brancos', Correio Braziliense, 15/07/2018. https://www.correiobraziliense.com.br/app/noticia/diversao-e-arte/2018/07/15/interna_diversao_arte,694873/entrevista-conceicao-evaristo.shtml 2020/08/11 閲覧.

GABRIEL, Rua de Sousa. A poética do sertão pelo bem-sucedido 'Torto arado' - Época, 22/08/2019/Atualizado em 13/09/2019. <https://oglobo.globo.com/epoca/cultura/a-poetica-do-sertao-pelo-bem-sucedido-torto-arado-23894455> 2021/2/20 閲覧.

Globo G1, "Assassinatos de negros aumentam 11,5% em dez anos e de não negros caem 12,9% no mesmo período, diz Atlas da Violência", 2020 年 8 月 27 日, <https://g1.globo.com/sp/sao-paulo/noticia/2020/08/27/assassinatos-de-negros-aumentam-115percent-em-dez-anos-e-de-nao-negros-caem-129percent-no-mesmo-periodo-diz-atlas-da-violencia.ghtml> 2020/10/19 閲覧.

GODOY, Arnaldo Sampaio de Moraes. "Um defeito de cor", de Ana Maria Gonçalves", EMBARGOS CULTURAIS, Consultor Jurídico 29 de novembro de 2020. <https://www.conjur.com.br/2020-nov-29/embargos-culturais-defeito-cor-ana-maria-goncalves> 2021/5/21 閲覧.

MARQUES, Luciana Araujo. "Não sou seu negro-Romance sobre o assassinato de um professor de literatura revela o processo de construção e introjeção do racismo", Quatro Cinco Um: a revista dos livros, 01 de set. 2020. <https://quatrocinco.um.folha.uol.com.br/br/resenhas/literatura/nao-sou-seu-negro> 2021/3/8 閲覧.

NEVES, Daniel. "História do Brasil - Período Regencial", <https://brasilecola.uol.com.br/historiab/periodo-regencial.htm> 2021/10/3 閲覧.

NOVA, Daniel Vila. "A desigualdade, seja do passado ou do presente, passa pela terra", Gama, 10 de Dezembro de 2020. <https://gamarevista.uol.com.br/formato/conversas/a-desigualdade-seja-do-passado-ou-do-presente-passa-pela-terra/> 2021/8/5 閲覧.

CARNEIRO (2021). literatura: torto arado - Itamar vieira junior - sinopse. professor carneiro, 13 de abril de 2021 <http://www.literaturapretensiosa.com/2021/04/torto-arado-itamar-vieira-junior-sinopse.html> 2021/9/9 閲覧.

RODRIGUES, Cláudio (2021). "Quando haveremos de promover o desencanto - Breve análise de "Torto Arado", de Itamar Vieira Junior", biblioo - cultura informacional, 18 de janeiro de 2021. <https://biblioo.info/quando-haveremos-de-promover-o-desencanto/> 2021/9/9 閲覧.

SCHRAMM, Franciele Petry (2019). "No atual ritmo, Brasil levará mil anos para titular todas as comunidades quilombolas", Terra de Direitos, 12/02/2019. <https://terradedireitos.org.br/noticias/noticias/no-atual-ritmo-brasil-levara-mil-anos-para-titular-todas-as-comunidades-quilombolas/23023> 8/11/2021 閲覧.

- RODRIGUES, Pedro Eurico (掲載年不明) . ”Revoltas do período regencial” <https://www.infoescola.com/historia/revoltas-do-periodo-regencial/> 2021/10/3 閲覧 .
- VEIGA, Edison (2021) . 'Torto Arado' reflete passado escravagista mal resolvido", 15.03.2021. DW made for minds. <https://p.dw.com/p/3qXYj> 2021/8/5 閲覧
- VIEIRA, Yvette (掲載年不明) . "O torto arado - Revista YVI. <https://www.revistayvi.com/pt/livros/o-torto-arado.html> 2021/09/11 閲覧 .

WEB サイト

- IBGE educa jovens. Conheça o Brasil - População COR OU RAÇA. <https://educa.ibge.gov.br/jovens/conheca-o-brasil/populacao/18319-cor-ou-raca.html> 2021/10/03 閲覧.
- Brasil Escola Quilombolas. <https://brasilecola.uol.com.br/sociologia/quilombolas.htm> 2021/8/10 閲覧 .
- ECOIA -UOL Por um mundo melhor. <https://www.uol.com.br/ecoia/ultimas-noticias/2020/03/12/f-palmares-ja-reconheceu-quase-2800-quilombos-saiba-o-que-esta-em-jogo.htm> 2021/8/11 閲覧 .
- Fundação Cultural Palmares. <http://www.palmares.gov.br/?p=53642> 2021/8/12 閲覧 .
- Prefeitura de Porto Alegre. https://www2.portoalegre.rs.gov.br/sms/default.php?p_seciao=689 2021/8/15 閲覧 .
- Quilombhoje. <https://www.quilombhoje.com.br/site/cadernos-negros/> 2021/10/03 閲覧 .

Afro Brazilian Writers that Have Begun to Speak Out

Chika TAKEDA

Summary

For a long time, Brazil had been imaged as a country where racial harmony had been achieved through the ideology of “Racial democracy”, but in the recent years, it has been officially acknowledged that racial discrimination exists in the country. In terms of literature, the Brazilian literature has been produced mainly by the white authors, written from a white perspective. Thus, the literature written by the Afro Brazilian writers has become a minority. However, recently, the Afro Brazilian writers have begun to speak out and play an active role.

In this paper, we will confirm what the Brazilian literature was like when the Afro Brazilian writers raised their voice, and then, through their writing, consider what and how did they begin to speak to overcome the inferiority. The analysis for this study was conducted through the three novels – *Defeito de cor (Color Defects)* by Ana Maria Gonçalves, *Torto arado (Bent Plow)* by Itamar Vieira Junior and *O avesso da pele (The Other Side of the Skin)* by Jeferson Tenório. All of the three novels have in common the attitude to investigate the origin and cause of suffering.

キーワード

ブラジル文学 黒人文学 マイノリティ文学

Keywords

Brazilian Literature Black Literature Minor Literature